



—その家によって引き継がれたやり方がある家の行事—

昨年度、「今のは知らないだろう」と教えて頂いたお正月行事。「興味をひかれつつもよく分からなかった。」という経験から、今年度はそのやり方や行事の想い出話を伺っています。また、文章だけだと伝わり難い作り方を動画という形で残したいと思っています。

今回は、町内の方に伺ったお正月の話を紹介します。
※ご本人の希望で名前の掲載は控えています。

今回のお宅では、門松や、“オンモノヅクリ”の作り方は父から教わったそうで、正月の行事やお飾り等は、その家によって異なっていたようです。

年末に神棚を飾るために十二注連(じゅうにしめ)、ごぼう締めに紙垂を12本つけ、左右6本ずつに分ける。真ん中に昆布、大豆の枝、堅炭を水引で縛り、そこに松の枝と、先にはみかんを刺したものを作ったり、門松(薪を切って束ねたのを台にし、きれいに皮をむいた松2本を芯にする)を用意していました。



写真では4本だが、
12本紙垂をつけていた

1月15日頃に行う“オンモノヅクリ”では、正月のお供えの下に敷いた半紙をとっておいて、「万御物作(よろずおんものづくり)」や「家内安全」「五穀豊穣」と書いて、味噌部屋に貼ったそうです。物を大切に使っていたことがわかる

エピソードでした。

また、オマイダマ(米粉を蒸かしたものを蚕の繭の形にし、柳の枝に刺した。)を作り、天井の東西南北の四方や墓や井戸、トイレに飾っていました。それと、刀(ヌルデ)の木を切って刀身部分は皮をはいだ)も作り、子どもたちが腰につけゆっくりと家の周りを「へーびもむかでもどーけどけ」と歌いながら歩いて回ったそうです。蚕の繭は、昔は楕円ではなく真ん中がへこんでいたことも教わりました。



お飾り用に切り取る予定の苗

詳しく話を聴き、想像よりも出来上がりが大きくて驚きました。それらを毎年作るのは大変だったと思いますが、さぞや華やかだったのではないかと感じました。

それだけ、新年を迎えることは一大行事だった当時の風景が浮かび上がってきました。

みなさんのご家庭では、どのような事を行っていたでしょうか。家ごとの特徴を、家族やご近所などで話してみるのも楽しいかもしれません。

このお話については、公式noteにてさらに詳しく掲載する予定です。こちらもお楽しみください。
引き続き、みなさんご存知のお話や、飾りの作り方情報をお待ちしております!

募集

現在の佐久穂町内で撮影された
「古い写真」を募集中!



写真プロジェクトでは、この地域に暮らした方々の古い写真とエピソードを募集し、3月に茂来館にて写真展を開催します。
デジタル写真の現在とは違い、カメラも珍しい頃のものは、その時代を知るとしても貴重な存在です。写真をお持ちの方はぜひご連絡ください。

時期 おおよそ100年前の大正12年頃～昭和30年代位

内容 日常的な風景や景色でも構いません。
(どういったお写真かお話を聞かせてください。)



さくほ集落の話の聞き手 公式note
<https://note.com/sakuhosyuraku>



「聴き書き活動紹介」

昨年度は、佐久穂町のたくさんの地域でお話を伺うことができました。ご協力いただいた皆様、ありがとうございました。

今年度も、まだ回れていない地域を中心にお話を伺う活動を行っていきます。聴かせていただいたお話は、公式noteで順次公開する予定です。

すでに、色々な思い出のかけらが少しづつ集まっています。丁寧に紡ぎながら、文章に残していきます。

情報提供等ご協力の程、よろしくお願ひいたします。

頭無(かしらなし)と人の暮らし

国道299号線、大石区にある旧分校を左折し、木に覆われた山道を曲がりくねりながら1キロちょっと進んだところに、頭無集落がある。現在は5軒の家が点在している。戦後に開拓された地である。

井出啓治さんは、開拓2代目。酪農歴は長く、45年間牛飼いの仕事をしてきた。「親父は牛を5頭飼っていました。もともとは野菜を作っていたけれど収入が安定してなくて、結局冬は出稼ぎ、東海道新幹線の工事現場で働いたらしいです。」現在牛は、和牛を含めると100頭飼っている。10年前には飼料会社を仲間と一緒に立ち上げた。飼料代の高騰対策と労働時間の短縮につながったという。

井出恭平さんは、啓治さんの長男。県外の会社で6年間働いた。脱サラした一番の理由は、親から酪農を廃業しなければいけないと聞かされたこと。「酪農を始めて3年弱ですが、別の世界にいたことで、酪農の仕事を違う角度から見れたことは良かった。目標を決めてそ

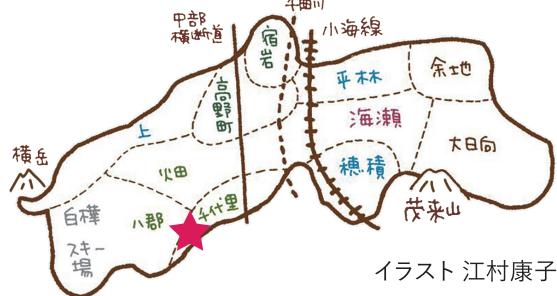


イラスト 江村康子



佐久穂小3年生に説明する井出さん親子

の達成のために何をすればよいかを考えることができたし、達成できて利益が出たときは嬉しかった。自営業の醍醐味かもしれません。」

井出直枝さんは、頭無で生まれ育った。一度も外に出たことがないという。「父親が牛を6頭飼っていたので、学校へ行く時に、背負子(しょいこ)に乳缶を載せて大石まで行きました。中学生になってからは、一輪車に載せて行きました。土の道でデコボコしていたので、乳缶を落としたことがあります。勉強が大好きで、先生になりたかった。家の事情で高校へは行けませんでした



井出真琴・美憂さん一家

た。母親は東京もんでしたので、ハイカラさんでした。よく両親に松原湖でボートに乗せてもらった記憶があります。」

井出真琴さんは、理学療法士を3年やって、親の農業を継いで2年目。「頭無に戻った理由は子供が出来たこと。都会で子育てをしたくなかった。自分の子供時代と同じ体験をして欲しかった。今は、仕事を覚えることで精いっぱいです。農業は肉体的にきついし、大変ですが、楽しい。ものづくりの楽しさを感じています。」

井出美憂さんは、真琴さんの妻。東京で保育士をしていた。「農業をやってみて、全てのことが面白い。機械を動かしたことがないくて、その一つ一つの手順が面白い。私はうろうろしているだけかもしれない。」と、ニコニコして答えてくれた。

どんなに小さな集落でも、人が住む限り、集落は生き続ける。

(文責 西村寛)



発行・問合せ:佐久穂町役場 総合政策課 政策推進係

TEL.0267-86-2553 〒384-0697 長野県南佐久郡佐久穂町大字高野町569番地

